

かわうそのすめる環境づくり意見交換行う

しんじょう

2007. 3. 1
すさき・かわうそクラブ会報
—No. 7—
発行：すさき・かわうそクラブ事務局

韓国槐山郡より、金さんらが須崎市を訪問

2月22日（木）、韓国忠清北道（チュンチヨンブクト）槐山（ケサン）郡庁文化環境課の梁（ヤン）さん、忠州（チュンジュ）環境運動連合の朴（パク）さんら8人が須崎市を訪れました。

前に、高知市にある「平和資料館・草の家」の事務局長をされており、現在は韓国で平和



金さん（左端）らと市役所にて。

運動をされている金英丸（キム・ヨンファン）

さんの調整により訪問を受けたものです。

以前、須崎市で確認されたカワウソや、韓国求禮郡との交流、現在実施している取り組みなど、当時の映像や写真、資料などを交えながら、須崎



市長室で、カワウソの皮を撮影。

市の「かわうそのまちづくり」に関する取り組みについてお話ししました。

カワウソの川

槐山郡で取り組まれている環境づくりのお話もお聞きしました。槐山郡を流れる達川は、以前は「獺（カワウソ）川」と呼ばれ、多くの野生のカワウソが棲んでいましたが、

河川工事や開発が進むにつれて本来の自然が失われていくとともにカワウソも減少し、今では貴重な存在となっておりそうです。

カワウソ自然公園の設置に向けて

1年間かけて達川流域を調査した結果、数組のカワウソのペアが確認されたそうです。今後は、川の流域に自然公園を整備し、餌場や巣となる岩場など、カワウソが繁殖しやすい環境を整え、また、子どもたちを対象にした環境学習を行うなど、カワウソの保護やカワウソのすめる環境づく



槐山郡での環境づくりに関する取り組みなど、いろいろなお話を聞きました。

にり取り組みたいと話していました。

また、河川工事を行う場合には、「できるだけコンクリートなどは使用せず自然に近

い形で実施する」「川の流域には道路などを整備しない」などといった自然環境に配慮した取り組みもなされているそうです。

新莊川にて

意見交換を行った後、新莊川をご案内しました。河川工事でコンクリートが多く使わ



カワウソがすめるような岩や穴があればいいのにと話していました。



河原にいたカモ。どうやら餌付けされているようで、なんの警戒もなく寄ってきました。

れているのを見て、「カワウソの巣になるような岩場や穴がなくなっている」と話して

いました。
最後に、津野町の「かわうそ自然公園」を見学した後、「道の駅かわうその里すさき」で昼食を一緒にし、お別れしました。



かわうそ自然公園にて（津野町）。資料や写真を見学しました。

お土産に、韓国のお菓子「チュンウチャルトウクッキー オリジナル」をいただきました。やわらかいクッキー風の生地、中はお餅がぎっしり。みんなでおいしくいただきました。



甘くておいしいクッキーでした。カムサハムニダ。

桑田山「雪割り桜」満開



満開の雪割り桜。一足早く春の訪れを感じさせてくれます。

須崎市桑田山(そうたやま)は、四国百山の蝮蛇森(ばんだがもり)の裾野に位置し、濃い桃色の美しい花をつけることで有名な「雪割り桜」(ツバキカンザクラ)が咲く地域です。

雪割り桜は、2月中旬から3月中旬頃の早い時期に咲く大変珍しい桜で、開花時には、地元協議会により雪割り桜まつりを開催しています。

毎年、県内はもとより県外から大勢の方にお越しいただいています。今年は予想を上回る来訪者に、地元関係者からも驚いています。

第4回

すさき野外博物館開催

「かわうそのまちづくり」事業の一環として実施している「すさき野外博物館」は、今回で4回目となりました。

第4回 冬に卵を産むカエル

2月24日(土) 午前10時から、押岡多目的集会施設で行われました。

今回は「冬に卵を産むカエルたち」と題し、講師にはNPO法人四国自然史科学研究センターの谷地森先生にお越しいただきました。

カエルは小さな虫などを食べます。逆に、カマキリ、ヘビ、タヌキ、サギなどが天敵です。このように、カエルのすむ環境には多くの生きものが関係しており、とても大切な環境だと言えます。

身近な生きものですが・・・

カエルは万葉集などにも多く登場し、古くから日本人にとって身近な存在でした。現在でも日本各地で見られ、夏になると田んぼなどから鳴き声が聞こえてきます。

しかし、その数は徐々に少なくなっています。理由としては、冬になると田んぼの水



講師の谷地森先生。

を抜いてしまうことや、田んぼ自体が少なくなっていること、沼や池といったものがなくなってきたことなど、カエルにとっての産卵場所が少なくなっていることが挙げられます。また、道路などにより移動経路(山から田んぼまで)が遮断された事なども大きな理由です。

その他、外来種の影響により生態系が変化したことも考

えられます。大正時代に持ち込まれた「ウシガエル」は、他のカエルを食べます。ウシガエルのいるところには、他のカエルはいなくなると言われるほどです。また、野生化したペット(アライグマなど)



道路を渡る際、車にひかれてしまう場合も多くあります。

も影響を与えていると言われています。

確認されたカエル

谷地森先生は、平成17年から押岡の休耕田にカエルの産卵場所を整備し、この1年半、カエルを観察してこられました。

現在、高知県では11種類のカエルが確認されており、そのうち、8種類が田んぼに卵を産むそうです。この8種類のうち、押岡では「ヤマアカガエル」「ニホンヒキガエル」「シュレーゲルアオガエル」「シユレーゲルアオガエル」

田んぼのカエル 見つけやすい時期

	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月
ニホンアカガエル								
ヤマアカガエル								
ニホンヒキガエル								
シュレーゲルアオガエル								
ニホンアマガエル								
トノサマガエル								
ヌマガエル								
ツチガエル								

「ニホンアマガエル」「トノサマガエル」「ヌマガエル」「ツチガエル」の7種類が確認されています。中でも、トノサマガエルは高知県の準絶滅危惧種に指定されており、貴重なカエルとなっています。確認されていない残りの1種

類は「ニホンアカガエル」といい、この種も高知県の準絶滅危惧種に指定されているカエルです。須崎市では横浪半島で確認されているそうです。

無数のおたまじやくし

押岡多目的集会施設で先生のお話をお聞きした後、カエルの産卵場所に移動しました。産卵場所には積み重なったワラがあちこちにあり、これは産卵しにきたカエルが鳥などに襲われないよう、隠れるためのものです。



手前にあるのが、積み重ねたワラ。産卵時にはカエルの隠れ場所になります。

しかし、おたまじやくしからカエルになる頃には、鳥やヘビ、イノシシなどが待ち構えているそうです。いったい何匹のカエルが産卵のために帰ってくるのでしょうか。

最後に

谷地森先生は、「今後も、時期をずらしていろいろなカエルが産卵してくるため、定期的に観察する予定です」とお



おかあさんと楽しそうにおたまじやくしをすくっていました。



ヤマアカガエルのおたまじやくし。ウヨウヨしています。

っしゃっていました。参加者からは、「最近、田んぼなどで泥遊びをする事もなくなり、こんなにたくさんのおたまじやくしを目にする事もないため、いい体験ができた」「捕まえたおたまじやくしは家に持ち帰り、子どもと観察しながら育てます」といった声も聞かれました。



田んぼの周りには、ふきのとうも。もうすぐ春ですね。

両生類絶滅の危機 カエルツボカビ症

両生類の減少・絶滅の要因として、化学物質による汚染、地球温暖化、紫外線の増加など、地球環境の変化があげられますが、近年では、それらに加え「カエルツボカビ症」が世界中の研究者の間で問題

とされています。

カエルツボカビ症は、両生類の新しい感染症で、原因となる菌が皮膚に感染することで発症し、感染した両生類の死亡率は90%以上とも言われています。

ツボカビは、両生類の皮膚に感染したのち増殖し、鞭毛の付いた遊走子（胞子）を水中に放出します。この遊走子は最長で7週間も水中で生き続けることができるため、それが水を介して他の両生類に感染します。

その存在が知られた1998年頃から、高い死亡率と強い感染力により、世界各地で猛威をふるい、中米のパナマでは、ツボカビが確認されてからわずか2カ月で地域のカエル個体群が全滅したという報告もあります。また、1980年以降、約120種の両生類が絶滅しており、これには、ツボカビ症が大きな影響を及ぼしていると考えられています。

ツボカビが感染するのは、両生類と一部の淡水性のエビだけで、人や魚に感染することはありませんが、水とともに手や靴に付着した菌を、人が別の場所に運んでしまう可

能性はあります。病気の個体を飼育していた水槽を水で洗い、それを捨てるだけでも、感染を広げる可能性があります。

日本で初めて発症が確認されたカエルも、購入されてきた海外のカエルが原因であったと見られています。ツボカビが自然界に広まると、根絶する事は不可能であるため、水田の減少などで減り続けている日本産のカエルたちに追い打ちとなる大打撃を与えかねません。

日本列島には固有種の貴重なカエルが少なくありません。また、日本の多様な自然の生態系は、カエルたちを不可欠の構成要員として形成されています。カエルたちがいなくなることで、水田などの害虫が大繁殖する一方、カエルを重要な食物にしている動物たちは激減します。

「ゲロゲロ」と、よく耳にする鳴き声も、やがて聞こえなくなるかもしれません。家庭で飼っているカエル（両生類）はもちろん、田んぼなどで見かけるカエルたちに異変があれば、すぐに獣医師などに相談するようにしましょう。

「かわうそと
共生できるまち」
〜かわうそのまちづくり〜

かつて須崎市には、多くのカワウソが棲息していました。しかし、時代の流れとともに環境は変化し、現在では、その姿を見る事はできなくなっていました。現在、須崎市に棲息する生きものや自然が、この先もずっと見られるものとは限りません。カワウソのように姿を見せなくなる可能性は十分考えられます。

「かわうそと共生できるまち」とは、カワウソだけではなく、そういった自然や生きものたちと共生できる豊かな自然と環境のまちを意味しています。

そのためには、「何かをする」ことも大切ですが、まず「心がける」ことが大切だと思います。

〜日頃から
みんなの心に
しんじょう君〜

平成19年度も須崎市に現存する身近な生きものや自然環境をテーマに「すさき野外

博物館」を実施する予定です。かわうそのまちづくりに関する多数のご意見、ご参加をお待ちしております。



今後の予定(19年度)

平成19年度のすさき野外博物館は、下記の内容を予定しています。詳しい内容や日時などは、広報や、各公民館・学校などに配布するチラシでお知らせします。みなさん、ぜひご参加ください。

- 第5回 カエルのタベ(6月)
- 第6回 ツバメの罅入り(8月)
- 第7回 渡りゆくワシタカ(10月)
- 第8回 人里の獣たち(12月)

STOP THE 地球温暖化

「地球温暖化」は、大気中のCO₂(二酸化炭素)などが増えることによって、地球全体の平均温度が上昇していく現象です。気候変動だけでなく、生活環境にも大きな影響が心配されており、国際的な枠組みの中で、国、自治体、企業はもとより、国民をあげての取り組みが求められています。

須崎市でも「地球環境にやさしいまちづくり」を進めており、平成18年度には、その取り組みの一環として、四国電力(株)と共同して、NEDOの補助事業を活用した「須崎市住宅省エネルギー連携推進事業」を実施し、一般家庭へのエコユニットと省エネナビの導入を推進し、CO₂排出量削減に取り組みしました。

一人ひとりが省エネを心がけて須崎市、そして地球を守っていきましょう。



省エネ啓発キャラクター
しんじょう・エネ君

今回、省エネ啓発キャラクターとして「しんじょう・エネ君」が誕生しました。しんじょう君とともに、今後の活躍が期待されています。特徴は、しんじょう君よりもやや面長。太陽光パネルのついたヘルメットをかぶり、発電された電気は背中のバッテリーに蓄電されています。胸の「S」は、「省エネ」「しんじょう」「すさき」など、色々な説があります。みんなにCO₂削減を呼びかけるなど、地球環境にやさしいまちづくりを応援していきます。



しんじょう君のいとこ
しんじょう・エネ君

「すさき・かわうそクラブ 会員募集中」

「すさき・かわうそクラブ」では、かわうそのまちづくりを応援して下さる方を募集しています。詳しくは、事務局までお問合せください。

また、かわうそのまちづくりに関するご意見・ご質問などもお待ちしております。

(事務局) 須崎市企画課

〒785-8601 高知県須崎市山手町1-7
TEL 0889-42-5691 FAX 0889-42-7320
E-mail kikaku2@city.susaki.kochi.jp

